

天地

ネットワーク テーブル 465号

発行：天地シニアネットワーク：2018・2・17

TENTĪ TODAY <事務所移転><アルガンオイル・特別斡旋>		1
会員の広場		2
連載作品		3
随 想	天のわざ、地のほまれー地球を測れ、宇宙を測れ 40. 電気分解	伊那 闊歩 3
随 筆	「1950年代の僕と街」(三) 田舎町苧田の暮らし「牛で田起こし」	臺 一郎 6
旅行記	そうだ京へ行こう・古刹の花物語(38) 哲学の道4・永観堂(禅林寺)	大竹 漢洲 8
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」 10	
事務局	10	

TENTĪ TODAY

世界の株式市場が暴落しましたが、NYが一本調子で上げ、各国の市場がそれについて行ったように見えていましたので、NYが下げて各国の市場が同時安となるのは不思議ではなさそうです。ただ米国金利が上がれば、円安に向かうと聞かされていきましたので、円高傾向になるのは意外です。

冬季オリンピックの開催にあたって政治的な駆け引きがいろいろとありました。円高は、会期中はお休みにして、終わると再戦というような火種が何か隠されているような気にさせます。

韓国での冬季オリンピック、金メダルになかなか届きませんが、いつものことながら、俄かファン、俄か専門家が登場して選手に無理やり「金を狙います」と言わせるプレッシャー、選手が可哀想です。もっと静かに見守って、存分に実力を発揮させてあげたいものです。

それにしても北朝鮮応援団の見事なパフォーマンス、世界が驚いたことでしょう。核開発を止めない軍事大国というイメージと全く違う演技が、テレビで世界中に送られました。日本のテレビは、どこも一日中放映していますが、世界が、北朝鮮にしてやられた感じがします。

中国人の若者が日本に来て驚くことの一つは、老人が多く働いていることだそうです。働きたいから働くという余裕、働かないと生活ができないという困窮、二つが入り混じった状態にあるのが、日本の現状と思われませんが、

国会で議論されている「働き方改革」では、老人がますます働かなくてはならないようですから、中国人の若者には日本がますます不可解ということになりそうです。

プロ野球はキャンプイン、そろそろオープン戦が始まります。毎年2月はそれが楽しみでしたが、マスコミは無視しているようで残念です。長年のプロ野球ファンには、スポーツニュースでキャンプ風景をみるのが楽しみ。特に新人を見るのが楽しみで、今年の清宮選手など早く見たいものです。選抜高校も3月に始まります。寒さもあと少しの我慢と自分に言い聞かせています。

2月12日に**事務所を、荒川区町屋に移しました**。町屋というと葬祭場を思い浮かべる方が多いかと思いますが、京成線、東京メトロ千代田線、都電・荒川線、の3駅があり、最近では、隣の北千住が都内の人気スポットになっていて注目されるようになりました。馴染み薄い下町ですが、ついで（葬儀の時ではありません）がありましたらぜひお立ち寄りください。

アルガンオイル、高齢者向きの安価で素晴らしい万能オイルです。**2月中に限り、特別価格、@1350円**（通常割引価格@1500円）でご提供することにしました。乾燥肌でお悩みの方、コレステロール値に問題のある方、ぜひお試しください。

従来同様、3本以上のお申し込みであれば送料は当方で負担いたします。

お申し込みは、メール、または携帯電話でお願いします。

津田・携帯電話：090-2534-1316

会員の広場

NHKの朝ドラ「わろてんか」、時代は大正時代、舞台は関西ですが、その頃の関東側の寄席状況がどうだったのか、大正九年、名人三代柳家こさんが当時をこう語っていたそうです。

「大阪の寄席の芸は、何よりもお客を飽きさせまいとするのが特徴で、それに対して東京はまず芸があるので、芸の面から見れば大阪式は外道で論外だが、東京式にはまだ良心が残されていた。ところが時代の変化というものでしょうか、東京の寄席にもあそびの場所であることが求められた」

要するに「客が笑わんとするために、寄席に出かける」傾向が強くなり、じっくりと芸を味わう風潮が少なくなってきた。このことが落語家に大きな影響を与える。それ以前に上方から、金山おどり、安来節のような落語以外のものが寄席に持ち込まれ、落語は、格がくずれ、修辞の妙は減り、無理に笑わせるような落語家が急増した。また一高座が15分というのが普通となって、話が胴切にされるので、勢い補助芸が必要となり、悪循環をおこして東京の寄席が生半弱になっていったとのこと。

以上のようなお話が、文春文庫・「大正百話」にありました。(津田)

連載作品

天のわざ、地のほまれ
—地球を測れ、宇宙をはかれ—

伊那 闊歩

40. 電気分解

前回、ボルタ電池とダニエル電池について考えた。これら電池の発明が後の世におよぼした影響は、たいへん大きかった。電池は物質の化学反応を利用して電気をつくり出す化学装置である。ボルタ電池は、陽(プラス)極から水素ガスが発生し、ダニエル電池については、陽極板に銅が析出することを知った。どちらの電池も陰(マイナス)極からは、亜鉛が溶液のなかに溶け出すのだ。つまり、電池の内部では化合物の分解が進行している。その副産物(?)として電流が発生するということなのである。

ボルタが電池を発明してからまもなく、1807年、英国の化学者ハンフリー・デービー(1778-1829)はナトリウム(Na)とカリウム(K)の単離(化合物の中からひとつの元素だけを分離して取り出すこと)に成功し、ひきつづきカルシウム(Ca)の単離に成功した。これらの元素はイオン化傾向が大きく、水と激しく反応して、それぞれ、水酸化ナトリウム(苛性ソーダ、NaOH)、水酸化カリウム(苛性カリ、KOH)、水酸化カルシウム(消石灰、Ca(OH)₂)となってひとまず安定するので(*1)、純粋な金属の状態で産出することはない。

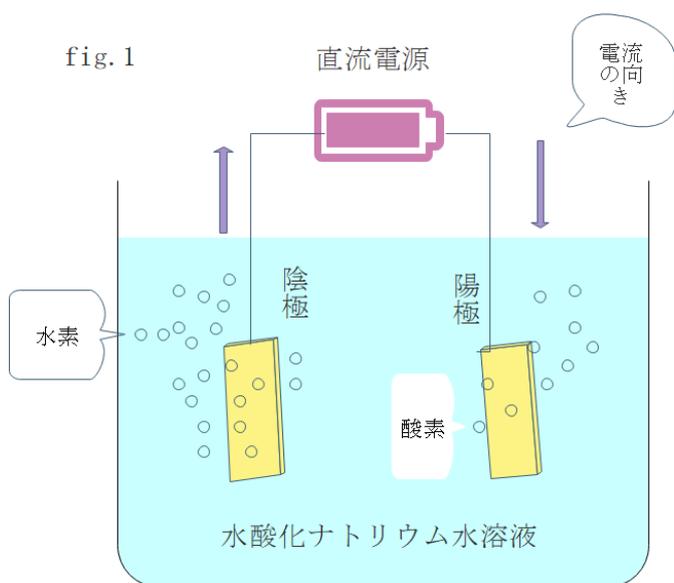
さらにデービーはボルタの電池を電気分解装置として活用し、ストロンチウム(Sr)、バリウム(Ba)、マグネシウム(Mg)などを水銀に溶けた(アマルガムという)かたちでとりだしたのだ。つまり、ボルタの電池は電気分解の装置としても用いられ、新しい元素の発見や元素の単離など大きな成果があがったのである。

水の電気分解は中学の理科の実験で行うのでなじみ深く、電気分解の結果、水素と酸素が発生することはいまや万人の常識となっている。この実験を最初に行ったのは、やはりボルタの電池が知られてすぐ、アンソニー・カーライルとウィリアム・ニコルソンら二人の英国人化学者であったという。

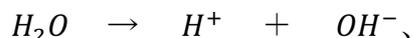
ここで一応、水の電気分解について復習しておこう。fig.1はその装置の

模式図である。純水は電気を通し難いので少量の水酸化ナトリウム (NaOH) を混ぜておく (空色)。そこに電極として (腐食されない) 白金の板 (黄色) を漬ける。それらを低圧の直流電源 (紫色) につなぐ。すると陽極側から酸素 (O_2) が発生する。陰極側からは、体積にして酸素の 2 倍の量の水素 (H_2) が発生するのが観察される。

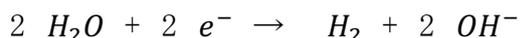
この簡単な装置によってなぜ水が電気分解されるのか、その理由を考えよう。



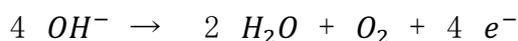
水酸化ナトリウム (NaOH) は、水溶液の中ではナトリウムイオン (Na^+) と水酸基 (OH^-) とに分離 (電離) しているが、ナトリウムイオンは水分子 (H_2O) を脅迫して常に水酸基を奪おうとする。水分子も強制的に電離させられ



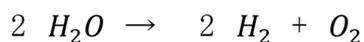
となる。電子の流れは電流の流れとは逆向きなので、陰極には電子が過剰に溜まっている。ナトリウムイオンに追い出された水素イオン (H^+) は、陰極の電子を吸って水素ガスになる。この反応は次のように表現される；



イオン化傾向の大きいナトリウムは溶液のなかに居残り水素だけが追い出されるのだ。こうして水溶液中に水酸基が過剰になり、陽極で次のような反応：

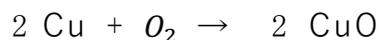


によって酸素 (O_2) が発生し、同時に足りなくなった電子を陽極に供給して全体の帳尻を合わせているのだ。このふたつの反応式を見かけ上、電子のやり取りなしに書いてみると

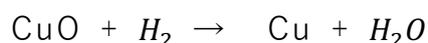


となるが、こうしてみると外からはナトリウムの役割や物質間の電子の授受の状況は見えない。ナトリウムは水の電気分解の黒幕なのである。

銅線や銅の粉末にガスバーナーの火をあてて熱してみると黒く変色する。煤が銅の表面について黒くなったかというのと、さにあらず。銅が酸化し



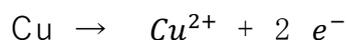
となって、酸化銅 (CuO) の黒い色が現れたのだ。このとき銅は酸化されたといい、ここに出来た錆 (CuO) を(銅の)酸化物という。これをもとに戻すには、この錆に熱した水素ガスを吹き付ければよい、つまり



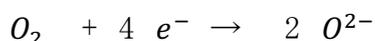
このとき酸化銅 (CuO) は還元されて銅 (Cu) になったという。同時に水素は酸化されて水になったのだ。酸化と還元はいつでも同時におこるのである。

この反応を次のように見てもよいのではないか、つまり、水素が酸化されて水になったのであるが、酸素の側から見ると、水素が勝手にくっついてきたのである。それゆえ、物質が水素原子を獲得する変化を還元ということにしよう。すると物質が水素原子を失う変化は酸化ということになる。厳密には、CuO のなかの酸素に水素がくっついたので酸素が還元されたというべきなのだ。同時に、水素は酸化されて水になったわけだ。

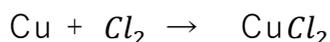
じつは酸化還元反応を、反応にかかわる物質どうしの電子のやりとりという視点に立って見ると、さらに反応が統一されて見えてくる。一般に、物質が電子を失うと、その物質は酸化されたといい、電子を獲得するとその物質は還元されたと定義するのである。すると銅が酸化するばあい、



によって電子を失ったので、銅は酸化されたとかんがえる、一方酸素は



のように電子を吸って還元され、その結果銅と酸素の酸化還元反応によりその化合物 CuO が生成されたのだ。このように解釈すると、たとえば、銅と塩素が化合して塩化銅が生成される反応：



も、銅が酸化され塩素が還元される酸化還元反応とみなすことができる。つまり、酸素も水素も関与していない反応であるにもかかわらず、酸化還元という統一的な観点から反応を観察することができるのだ(*2)。

ダニエル電池の陽極には銅が析出するのであるが、この装置は金属の表面に電気めっき(*3)を施す装置としても使えることを示している。たとえば、

fig.1 の装置で、電解液としてシアン化銀カリウム ($\text{KAg}(\text{CN})_2$)、陽極に純銀 (Ag)、陰極にはめっきを施す金属をつけて通電すれば、銀めっきをすることができる。

鉄板の表面に亜鉛めっきをほどこしたものをトタンといい、錫めっきをほどこしたものをブリキという。亜鉛は鉄よりもイオン化傾向がおおきく、トタンは傷ができて、雨水などに亜鉛が溶け出し、鉄錆が出にくいいため、屋根板として用いられる。一方、ブリキは傷ができて雨水にさらされると本体の鉄がさきに溶けだすことになるため、ブリキは屋根や塀の材料としては不適であって、もっぱらオモチャなどに使われる (ギョウター・グラス：ブリキの太鼓)。

ところで、多くの元素の単離に成功した英国人科学者デービーの研究室にたいへん有能な助手がいたのだ。かれの名は、マイケル・ファラデー (1791-1867)、現代電磁気学建設の始祖とされる偉大なサイエンティストである。ナポレオンのロシア遠征で騒然とする世の中にあって、かれは黙々と研究に打ち込み、ボルタの電池を利用して、1812年、硫酸マグネシウムの電気分解に成功した。その後、ファラデーの法則として知られる電気分解の基本法則 (*4) を発見したのだ。電気分解によって析出した物質質量 (n [mol]) は、電流の強さ (I [A]) とそれが流れた時間 (t) に比例し、物質のイオン価数 (z) に反比例することは、容易に予測されることなのであるが、かれはその比例定数 F

(ファラデー定数) を精密に測定し、はやくも優れた実験物理学者としてのマイケル・ファラデーの名を世に知らしめたのである。

次回からは、ファラデーが頻繁に登場する。むしろ彼を中心に電磁気学の発展をみて行こうと思う。

(*1) 地上にはいたるところに石灰石 (岩) がみつかる。その主成分は、炭酸カルシウム (CaCO_3) で、大理石や方解石も石灰石の一種である。これらのもとをたどれば、海に行きつく。空気中の二酸化炭素 (CO_2) が海中に溶け込みプランクトンの死骸などカルシウムと化合することにより生成される。それが膨大な量のマリンスノーとなって海底に降り積もり石灰岩になる。二酸化炭素を一番吸収してくれるのが海なのだ。なお、デービーの時代には、生石灰 (CaO) がカルシウム (Ca) という元素そのものと考えられていたが、かれはそれを単離して純粋なカルシウムをとりだしたのだ。なお、カルシウムはストロンチウム、バリウム、ラジウム、ベリリウム、マグネシウムなどと同じく、アルカリ土類金属に分類され、いずれも白色の軽金属である。

(*2) 今回は、卜部吉庸著「化学の新研究」(三省堂) を参考にさせていただきました。

(*3) めっきは元来、日本語なのだそうでひらかなで「めっき」とかくことに

する。ブリキやトタンは外来語だそうであるから、カタカナでかくことにする。奈良、東大寺大仏殿の大仏（盧舎那仏）はもともと金めっきされていて黄金色にかがやいていたそうである。その方法は、純金を水銀にとかした金アマルガム溶液をつくり、それをピカピカに磨いた青銅の仏さまに塗りこみ、水銀を蒸発させて金を青銅の表面に定着させたという。今から 1250 年も昔に、当時の建築技術者たちはたいへんなハイテクを自在に駆使していたのだ。

(*4) ファラデーの電気分解の法則は次のように表現される：

$$n = \frac{It}{zF}$$

ここで、n [モル] は物質量、I[A]は電流、t は時間、z は物質のイオン価数、F はファラデー定数：F = 9.6485×10⁴ (C/モル)

随筆風「1950年代の僕と街」(三) 臺 一郎

田舎町苧田の暮らし「牛で田起こし」

昭和 30 年の春、僕は父の転勤で北海道から九州に引越した。そして 31 年の夏までの一年数ヶ月を福岡県京都郡の苧田町というところで暮らした。

苧田町は、現在の北九州市小倉駅から日豊線で約 30 分の距離にある瀬戸内海というか周防灘に面した町だ。かつては農業と石炭の積出以外にこれといった産業のない九州の田舎町だったが、昭和 50 年代に日産自動車の工場誘致に成功。それを契機に電気機械やセメントなどの工場立地が相次ぎ、さらに昭和 60 年代には沖合いに北九州空港が開港したことで、今では人口 3 万 4 千人の立派な町へと変貌した。

僕が引越した昭和 30 年当時の苧田町は、人口が 2 万人を少し超える程度だった。それ以前に住んでいた北海道の小樽市は、デパートや日銀の支店もあって、人口は 26 万人で道内第二位の都市だったから、それと比べると苧田は、当時 8 歳の僕から見ても、田んぼと港と小規模な商店街があるだけの寂しい田舎の町だった。

僕達家族が引越した家は、苧田の駅から 15 分くらいのところにあった 70~80 坪位の敷地に建つ一戸建てで、隣にも似たような一戸建てが建っていた。二軒の家の周囲は 3 方が田んぼ、残る 1 方には細い道路と高圧線の鉄塔とそれに沿って土手から土手の川幅が 7~8m の小川が流れていた。南西側に 100m ほど離れたところに日豊本線があって、日中は平均してほぼ一時間に一本ほどの頻度で蒸気機関車に引かれた客車や貨車が走っていた。汽車はちょうどわが家の正面を通過するあたりで、お約束のようにちょっと物悲しげな汽笛をポーッと鳴らし、煙突から黒い煤煙や白い蒸気をモクモクと吐きながら、機関車の動輪につながったシリンダーをガシャガシャと鳴らして通過していった。

日豊線の線路の向こうにはやはり水田地帯が広がり、その先は緩やかな傾

斜地の棚田となって背後の山裾までそれが続いていた。山裾には茅葺の農家集落があって、夕方ともなると夕餉の煙がうっすらと漂い、背後の山々の向こうに沈む夕陽に染まった空と合わせて、まさに典型的な日本の農村風景のような景観が広がっていた。

わが家の周囲の田んぼでは、毎年 9 月から 10 月に稲刈りが行われた。その直後だったか少し経ってからだったかは覚えていないが、田んぼの土の養分を豊かにするために、レンゲ草の種がまかれた。翌年の 3 月から 4 月にかけてレンゲ草は一斉に開花し、家の周囲はどちらを見ても薄紫やピンクの花が一面に咲き乱れた。子供心にもなんてきれいなんだろうと感動した。

一面のレンゲ畑は、まだ花が咲いているうちに、田おこしで根元から土ごとほり返される。そうすることでレンゲの根に含まれる窒素が田んぼの土に混ざり、良質な稲を生育する土壌になるのだという。耕運機がまだ普及していなかった昭和 30 年頃、この作業は主に農耕用の牛に鋤を引かせて行われた。わが家の敷地の境にある、竹を縦横に組んだ柵から向こうはすぐに田んぼで、百姓に誘導された農耕牛が鋤を引きながらレンゲ畑を掘り起こしていた。

農耕用の牛なので気性はおとなしい。ただ、いつもよだれをたらし、時折糞をした。そしてたまに『モー』と泣く。時間がゆっくりと流れるのんびりとした光景だった。ある日、わが家の敷地の手前まで鋤を引いて来た牛がひととき大きな声で『モーー』と泣いたことがあった。たまたま母と庭に出ていた当時まだ満 2 歳にもならない妹は、突然目の前で、大声で鳴いた牛の大きな声と口を開けた顔に驚愕し、大声でワーワーと泣き始めた。

今では、田おこしは九州でもトラクターか耕運機で行われるようになり、鋤を引く農耕牛の姿は懐かしい記憶の中にしか存在しない。

<そうだ京へ行こう・古刹の花物語> (38)

哲学の道 4・永観堂 (禅林寺)

「哲学の道」の出発点は、人によって思い入れがあるに違いない。ある人は南禅寺の「三門」であると言ひ、ある人は「永観堂」であると言うかも知れない。又、ある人は東山トンネルを流れた疏水分水路が姿を現わす「熊野若王子神社」が出发点と主張するかも知れませぬ。この散策路近くに居宅があり、日頃から健康や思索のために好んで歩いてきた小径を、京大西田幾太郎博士に因んで「哲学の道」と呼ぶようになりました。西田博士は、小径の出发点云々の決着に名言を残しています。

人は人、吾は吾なり とにかく
苦行く道を吾は行くなり

流石、哲学者です。この道が「哲学の道」と呼ばれるようになった由縁です。

余談です。西田博士が実際に歩いた小道は現在「哲学の道」と呼ばれてい

る道ではありません。余談は後ほどに

旅人にとっての「哲学の道」の出発地を選ぶとすれば、インクラインと密接な関係のある蹴上発電所跡にしたい。「哲学の道」の堀割(水路)には、インクラインからの分水が流れています。堀割には鯉たちが泳ぎ、夏には多くのホテルが飛び交う自然な姿を目にすることができるのも、琵琶湖から引いた澄んだ水が流れているからです。借越ですが、もし許されるのであれば、旅人は「哲学の道」では無く「哲学の小路」と呼びたい。

旅人は「哲学の道」が好きで、度々散策します。この道を歩かないと京都に旅した気分になりません。何故か?散策するに際して、ある習慣があります。歩く道筋です。必ず「南禅寺」方面から歩き出しています。過去一度たりとも銀閣寺から路を辿ったことはありません。考えると不思議です。無意識に水の自然の流れに従っていたのかも知れません。深い考えはありません。習慣とは恐ろしいものです。

相変わらず人と車で混雑している南禅寺の中門を潜り、一先ず車の往來を避けて「三門」に向かいました。思い出の多い三門です。桜にも紅葉にも映える美しい三門です。過ぎ去る春を惜しむように降り注ぐ桜吹雪の中に、三門は浮かび上がっています。巨大な建造物を自然の美が包む姿は、見飽きない平和な光景です。桜は平和の象徴です。

三門前を左に曲がり、塔頭 聴松院の前に出ました。美味しい湯豆腐を振舞ってくれた院と扉は固く閉ざされたままです。この路は旅人にとって既に「哲学の道」です。隣の湯豆腐店・奥丹の前には、早くも昼食の客が開店を待っています。聴松院と奥丹とは生垣で仕切られた庭続きでした。酔客が発する大声が、時折垣根の間から聞こえてきたこともありました。懐かしい思い出です。

奥丹の前の道を北東にしばらく歩くと、東山を背にした白い建物が右手に現れてきます。東山中学・高等学校です。緑の多い環境の良い処にある学校です。京都でも教育程度の高い優秀な学園と聞いています。ここ南禅寺の北辺り一体は、平安期には藤原氏の別荘が建ち並んでいました。緑が多い地域で「哲学の道」に平行して通じている鹿ヶ谷通の西と東では、何処か違った空気が漂っています。

学園は男子高らしく、時折校舎から剣道・柔道の元気な掛け声が聞こえてきます。東山から流れ落ちる勢いの良い水音を聞きながら、「哲学の道」脇の路地で焼き芋を食べた記憶があります。学園の前を通る度に思い起こす懐かしい思い出です。紅葉の時期も終わり寒い秋の雲り空の日でした。早い昼食を済ませて「哲学の道」を歩き始めました この学園の近くまで来ると、焼き芋の匂いが漂っています。空腹を感じて二本注文して、水路脇の岩に腰かけて食べました。美味しい焼き芋であったこと、薩摩芋の暖かさで、空腹と寒さが癒されたことが強く記憶に残っています。どうしても良い事が旅の思い出として残るものですね! 蛇足です。今年(2015年)5月に「哲学の道」を散策した時に、何と"mango"を、悦子と分け合って食べました。夏を思わせる暑い臍月であったので、甘い汁は疲れを取ってくれました 新しい思い出が記憶に刻まれました。

学園隣が「永観堂」です。紅葉の「永観堂」として有名です。永観堂「紅葉

の」の定冠詞で呼ばれる程秋が有名です。残念ですが、桜のイメージの薄い寺院です。紅葉以外の時期は、ご本尊「見返り阿弥陀」の小さな体が、大伽藍を支えている感じがします。

永観堂は浄土宗西山禅林寺派の総本山です。総本山だけあって寺号も矢鱈長く「聖衆来迎山無量寿院寺」です。通称が「永観堂」(禅林寺)です。永観堂が多くの堂宇の整った大伽藍となる始まりは、空海の弟子真紹の手腕にありましれ 真紹は藤原氏の有力者から屋敷を買い取って、真言宗の道場として開基しました。永観堂の始まりです。貞観5年(863年)清和天皇から勅願を下賜された寺号で、「禅林寺」となりました。七世の住持永観律師の時に、ご本尊として「阿弥陀如来」を迎えて、浄土念仏の道場に変わりました。

永観堂の「見返り阿弥陀」を有名にしたのは、ご本尊が奇跡を起こしたからです 永観律師が本堂(阿弥陀堂)で念仏行道をしていると、正面に安置していたはずの阿弥陀如来が台座から下りて、二本目の柱の処に現れ、背後を振り向き様「永観!遅いぞ」と声をかけ、如来は更に続けて「疲れたのかな」と労りの言葉を掛けたそうです。振り向いた姿を記憶していた律師が、仏像にしたのが「見返り阿弥陀」と言われています。

しかし阿弥陀如来のお姿は、誰か人を呼んでいる姿勢ではないように思えます。如来の視線は低く、一足下にある小さなモノにも、労りの表情(慈悲の心)で見詰めているお姿です。右手の指のも、決して律師の行道の遅れを叱責しているのでは無く、“おや?”と何かを眼にした形に思えてなりません。一度如来の表情姿勢を観察してみてください。細かい事が気になる、性分です。申し訳ありません。

余談です。清和天皇から下賜された寺号「禅林寺」を「永観堂」に替えたのは、阿弥陀如来の奇跡が起きた七世永観律師以降です。律師の名が永観堂に成りましたが、禅林寺と併記しています。

永観堂は浄土宗西山禅林寺派の総本山の風格をした大寺院であることは書きました。寺院内の堂宇も多くしかも複雑な構造を成して順路に従わないと迷う恐れがあります。言い方を変えれば、“永観堂”は雨天に拝観するのに相応しい寺院です。拝観する処が多くて雨天の日は、濡れずに最適な寺院です。永観堂に対する結論です。

旅人も雨天には幾度もお世話になっています。雨の日に「釈迦堂」や「阿弥陀堂」の広縁に腰掛けて、雨粒を眺めたり雨音を聞くことは、なかなか風情のあるものです。忘れていた小さな自然の素晴らしさに気づきます。極限すると永観堂には、“秋の紅葉”と”ご本尊”しかないと言うことです。

「見返り阿弥陀」の安置されている「阿弥陀堂」から「開山堂」に戻るには、講堂を繋ぐ長い階段状の廊下を幾度か渡って行かなければなりません。その一部が「臥龍廊」と呼ばれています。屋根の反りが龍の背中に似ているとの事です。回廊建築儀式の一つです。「臥龍廊」の脇に「三鈷の松」と呼ばれる大きな松があります。葉先が三つに分かれている不思議な松葉です。この松葉を持っていると「智慧」「慈悲」「真心」を授かるとのことです。旅人も大事にしています。急に雨が降り出してきました。通り雨でしょうか?

大切なことを失念していました。「臥龍廊」の下り階段右側に「水琴窟」が

あります。「水琴窟」は、日本人の豊かな感性が生んだ自然を愛する音の響きです。心に響く音色です。「水琴窟」の音色も上品ですが、雨音も詩的です。

帰り道は、雨も上がったようなので境内の庭園を散策して「哲学の道」に戻ります。園内の桜は満開で見頃です。茶店も開いています。美味しそうな「関東煮」の匂いも漂っています。疲れた旅人を誘っているようですが、がんの再発で抗がん剤を眼用してから疲れやすい身体に成りました。「酒」も飲みたくなくなります。極端に弱くなりました。先を考えて自重しました。薄日も差し始めて、雨を避けていた花見客も戻り賑やかに成りました。

文化講座・講演会

奈良興福寺文化講座 2018年3月8日(木曜日)

午後5時半～6時半：第一講「興福寺の名宝-阿修羅と運慶の彫刻-」
興福寺国宝館長 金子啓明

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映

会場：(学)文化学園 文化服装学院内

受講料：500円 先着200名

(JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分)

第92回 新三木会講演会のご案内

1、日時・会場 2018年3月15日(木)13:00-15:00 如水会館

2『人口減少・高齢化と経済成長』 吉川 洋氏 立正大学経済学部教授

東京大学名誉教授 (元経済学部長)

3. 申込・会費 E/Mail: shinsanmokukai@gmail.com

TEL: 047-464-4063

フルネーム：一般・天地シニアネットワーク

会費：2000円 婦人1000円 学生無料

茶話会：15:15-14:20 千円 (自由参加)

4. ホームページ

<http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>

5. 予告

● 4月19日(木)第93回 出口治明氏 立命館太平洋大学学長
『日本の未来を考えよう』

● 5月17日(木)第94回 春名幹男氏

元共同通信ワシントン支局長

『気になる米国トランプ政権の行方』(仮題)

事務局

<事務所移転しました。メールアドレス、住所は下記のようになります>

<振込先> 三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7871532
(口座名) テンチシニアネットワーク

<配信・郵送、不要の場合はご一報ください、中止いたします。>

天地シニアネットワーク・テーブル・465号

発行：2018年2月17日

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

新住所：〒116-0001 荒川区町屋3-2-1
ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話・FAX・未定

携帯電話(津田)：090-2534-1316